選考会を終わって

佐藤 信

２０２０年12月、第27回ＯＭＳ戯曲賞の最終選考会。アクリル板で隔てられ、マウスシールドをつけての議論は、いつも通り熱心に、そして活発におこなわれた。時間も五時間をこえる長丁場におよんだ。内容についても、例年ときわだって違っていたという印象はない。しかし、選考会、それにつづく授賞式、公開選評会を通しての、何とも言えない「非現実感」を、ぼくは、最後までぬぐい去ることが出来なかった。もしかしたら、自分ひとりだけの思い過ごしだったのだろうか。そうかも知れない。選評会の最後に思わず口をついて出た「いまを記録し、描くこと」への呼びかけなど、ちょっと不安定だったかも知れない自分の気持ちについての自覚はある。

思い返すと、選考会前、九編の最終候補作品を読んでいる時からそれはあった。テキストから立ち上がる世界と自分自身とがうまくつながらないというか、いつものようになかなか自然に重なってくれない。これまで数多く演劇のテキストを読んできてはじめて味わう感覚、体験だった。

小説や詩と違って、演劇のテキストを読む場合、内容は頭の中に仮想された舞台（劇場）空間を通して理解される。たとえテキストの中の設定がどんな時、どんな場所であったとしても、読み手の頭の中には、いま、ここの舞台（劇場）があり、想像力はその舞台を通してひろがっていく。俳優という具体的な人間と、同じように具体的な観客という人間との出会いによって成立する、演劇表現ならではの「現在性」という特質だ。演劇テキストの読みにくさ、そして面白さの基本もそこにある。その脳内舞台（劇場）が、今回は、なかなかうまく立ち上がってくれなかった。

原因はもちろん、２０２０年春からのCOVID－19感染症の世界的な拡大によって、ぼくたち周辺に起こった、そしていまも起こりつづけている、もろもろの出来事だろう。舞台（劇場）の場でも、当初の上演自粛にはじまり、現在の、検温、消毒、対人距離やマスクの着用、入場定員の制限、舞台と客席との距離の確保など、さまざまな対策や規制にいたるまで、大きな影響を受けている。

そのような、状況の中で、テキストを読みながら、仮に思い浮かぶ脳内舞台（劇場）は、いつもとは違って、限りなく「非現実」的な劇場に思えてならなかった。人と人とが密集し、時には抱き合い、時には叫び、時には客席間際で語りかける。舞台の上にも客席にも、マスク着用者はひとりもいない。そんな劇場が、いま、世界のどこにある？

もしかしたら、神経質になり過ぎているのだろうか。猛威をふるっているCOVID－19も、いつかは治まり、舞台（劇場）はやがて元通りの姿を取り戻す。いまは落ち着いて、将来の再開に向けて、それぞれ工夫を凝らしながら出来る限りの活動をつづけていくしかない。正論ではあるし、ことさらの否定をする気持ちもない。だが同時に、「元通りの姿を取り戻す」や「活動の再開」について、それほど楽観的には語れない危うさも強く感じている。

ぼくたちは、現在の事態について、直接に感染症COVID－19にかかわる出来事と、COVID－19をきっかけにあらわになった出来事とを、はっきりと識別してとらえ、考えていく必要があるのではないか。感染症はいつか、他のすべての病と同じように、「平常」という名の着地点を見いだして、ぼくたちとの長い共存の時代を迎えるだろう。しかし、COVID－19によってあらわになった出来事についても、どうだろうか。

舞台（劇場）はなんのためにあるのか、人びとはそこになにを求めているのか。舞台（劇場）が舞台（劇場）であるために、いまはそんなもっとも基本的な問いかけにまで立ち戻り、自らの脳内舞台（劇場）を再構築し、その上でこそ、あらたなテキストを迎え入れる時なのだと思う。

今年もまた、選評とはほど遠い内容になってしまいました。読者と候補者の皆さんには、九鬼葉子さんのレポートの参照をお願いしてお詫びします。そして、大賞の山本正典さん、佳作のピンク地底人３号さんには、お祝いの言葉を。おめでとうございます！